

San-ai

三愛会会誌 No.66 '71-1
特集：生活の発見



現代のビジネス・バイタリティー

——個人の心性をどう生かすか——

栄久庵 憲 司

<GKインダストリアルデザイン研究所所長>

* 生きることを休むな

私は「働く」という言葉が嫌いです。なぜかと申しますと、「働く」という言葉がでると必ず「忙しい」というふうにつながるわけであり、これはあまりよい言葉ではないからです。「忙しい」の「忙」という字は心が亡びると書きます。日常、不用意に「やあ、忙しいですか」などと問いかけることがよくあるものですが、これは「心を亡ぼしていますか」と問いかけていることにほかなりません。ですから「はあ、忙殺されそうで」「それは結構ですな」といったやりとりになりますと、「はあ、心を亡ぼした上に身体も死にそうで」「ざまあみろ」ということになってしまいます。働く、ということは自分の行動が相手にある結果をあたえたり、影響をおよぼしたりするギブ・アンド・テイクの関係、相対関係であります。この関係がバランスを保てなくなってくると必ず、「忙しい」という言葉が出てきます。私はこの言葉に寄りかかった自己弁護や合理化が危険であるといいたいのです。

そんなことを言ったら我々は毎日働いているし、働くのをやめるわけにいかないじゃないか。一体どうすればいいんだ、ということになるでしょう。それではどうあればいいかという、働くという言葉とともに、心に浮かぶ文字は「心がいきいきする」と書く「性」という文字でなければならぬのです。

性を大切にすると、いうならば人の心に生命を継続させてゆく充足感がなければ、働くという意味はありません。それが無いから「忙しい」という弁解が生じてきます。そしてまた、働くということは、相手がいなくなっても働き続けることが大事だと思います。働くことをやめることは、とりもなおさず性のおわりであるからです。そしてまた忙しく働くということは、生をやめることにもなるのです。

* 天上天下唯我独尊

スポーツマンがスポーツをやっているところを見て、あなたは彼が働いていると思いませんか。それがプロのスポーツマンであっても、働いているといったものではないように思えるのではないのでしょうか。日頃の鍛練によって記録の更新を目指し、それを実現しようとする。人間ひとつの壁を破ることは基本的に楽しいものですから、楽しみと為す、「為楽」ということの中で彼らは行動しているのだと思います。私たちは全てを楽しみとすることが非常に大事であり、そのことこそが人間の行為、行動を継続させ、その結果に対して悔悟の念というものをなくさせます。ビジネスマンは為楽をもってビジネスにあたるべきであり、後悔、弁解は一切無用です。私は日頃、後悔、弁解を聞かされると大変腹が立ちます。そんなものは誰が聞いたって楽しいものではありません。

弁解がうまいために出世する者もいれば、後悔によって自己満足しようとする者もあり、人間さまざまですが、それらは終局において何も生み出すことはできないのです。そんなビジネスは心を亡ぼすからやめた方がいい、と申し上げたい。ただし、反省は必要です。反省とは気持のよいものであり、創造的なものであり、自分に自信をつけるものであって、これは人間独自のものです。犬や猫では反省は不可能です。

釈迦は天上天下唯我独尊といいましたけれども、それは自分ひとりが偉いのだという意味ではなく、自分が必ず人としての性を体現していける確信を表明した言葉なのです。この確信において心を生かそうと活動するとき、後悔や弁解はまったく役に立ち得ないのです。反省をもつときこそ、私たちは誰でも唯我独尊といえます。

* 命令＝プロジェクトの発見・大人たいじん

ビジネス・バイタリティーというものは、バイタリティーを基礎におきながら、プロジェクト＝命令を発見できる人ではないかと思えます。それは

命令を受けてから仕事をするのと、命令をする仕事との差です。命令されるより、命令する方がはるかに大変だし、創造的な仕事でもあります。ですから強い人、偉い人というのは命令がうまい。世界の賢者は皆、命令上手で「左の頬を打たれたら右の頬を出せ」などというのがあります。しかし、企業組織内で上から下へ命令がスーッと通じるとするのは、命令ではありません。

命令の「命」は「いのち」という意味であり、「令」は「律令」の令で「しくみ」ということ、つまりはプロジェクトということなのです。だから命令を受けた過程において、プロジェクトとして楽しみを感じられないとバイタリティーは増大しません。もっとも、バイタリティーというものは教えられて得られるものでもありません。たとえば、芭蕉が蛙と古池という二つのモチーフを見ただけで、「古池や蛙飛びこむ水の音」という動と静寂の世界を創造したあのバイタリティーはひとくちに語りつくせるものではありません。それは奥の細道などを行脚することによって養われたもので、じかに肌で感じたものなのです。

今日の情報化社会においても、多数の情報を得



たからといって、これはバイタリティーにはならないのです。むしろ情報を出す人間、つまり自分が情報源になるべきであり、企業のなかでもそのような人間は必ず必要です。それと同時に企業もそういう人間を育てる土壌を持つべきです。しかしなんといいても一番大事なのは、本人が自分が情報源になるのだという自覚を持たなくてはなりません。他人がネコに鈴をかけようと提案する前に自分がそれをしていなくてははいけません。元来、人間は弱い存在であるから、お互いに仲間をつくらたり、切磋琢磨しあったりして生きていく。つまり多くの場合、同僚同士の鈴のかけあいが行なわれるというわけです。

昔からの格言に「早起きは三文の得」という言葉があります。これなどは、体験にもとづいた人間のバイタリティーを適格にいいあらわした言葉だと思えます。そこからバイタリティーとともに、ビジネスという意味も読みとれます。現在で

は、ビジネスという言葉は狭い意味で使われていますが、家庭をうまくやっていくことも、友人関係を保つことも、またものの秩序をふまえるとか、ものを新しく作り変えるということも、すべてビジネスです。そういう中の一つに企業改革、組織改革などがあるだけなのです。この「三文の得」という短い言葉の中に、現代の情報社会にも通用する真理が含まれているといえます。

さて、次に大事なことはオーナー・シップを持つということです。自己に対して他人に対して確とした芯を持ちたいものです。自己へのオーナー・シップがないと仕事をするという真の意欲を失い、仕事に対する余裕をなくしてしまうからです。そこからは絶望しか生まれません。その点、所得

倍増政策をした池田首相の放言「貧乏人は麦を食え」という言葉に私は感動しました。それは麦はある、麦だけは保証したぞという意味で、国民に対して国の最低限を保証しています。その堂々たる主張と同時に吉田首相の「バカヤロー」発言も立派だと思いました。オーナー・シップがあるし、唯我独尊だし、人間である限り怒りたいときもあるんだということです。

現在、私が国に対してもっとも不安を感じていることは、一国の首相が経済成長というビジネス

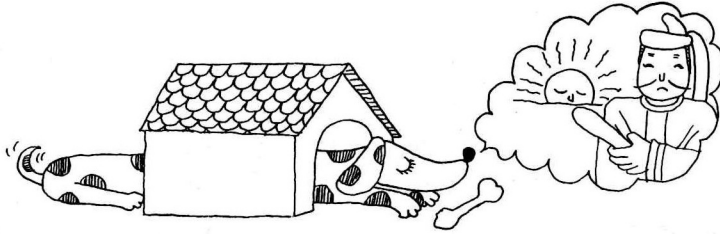
と取り組んでそれを成功させましたが、その後、そういう積極的な姿勢が政府にはないということです。しかも成功したとはいっても、経済成長は国がオーナー・シップをもってやったわけではなく、気の小さなプロフェッショナル達にまかせてしまったので、いまでは経済成長もその人達だけのものになっているような感じがします。つまり、国自身が小人国になってしまっ

ています。しかし、オーナー・シップをもつためには、いつまでも小人国であってはダメで、大人国にならなくてははいけないと思うのです。

この大人^{たいじん}というのはオーナー・シップについて、大事なことです。大人とは何かというと、昔の中国では自分の屋敷に4人の妻をかかえている者と定義づけられていました。4人の女からの肉体的要求、経済的要求、彼女ら相互のいざこざの処理ができる男というのはよほど出来た奴であったことでしょう。つまり、もののわかった奴、ということでしょう。

国際社会に活躍できるビジネスマンは大人的バイタリティーの持ち主であることが必須の条件です。そして大人は汚いことをしないということ





す。堂々とスジを通すということです。

先に亡くなられた川島正次郎氏は絶対に台湾に行かなかった。これは将来、中国に渡って周恩来に会うためにその義理を大切にしていたわけなのです。このあたり、やはり大人です。それは男の信義というものをもち続けたよきオーナー・シップです。

そのような国際関係では、つねに相手に会う機会があるわけではありませんから、集約された状況で会わざるを得ません。そこで信義が問題になってくるわけです。ですから外国人だからといってけって背伸びをする必要はないのです。相手に自分の本当の姿を見てもらえばそれでいいわけです。それが国際社会へ出る基本であると思います。ビジネスマン同士でもそれは同じことがいえます。

* リコー三愛グループを高めるために

さて、最後にプロジェクトに取り組むビジネスマンに私がいいたいのは、高い職業、高い地位をより求めてやまないようであってほしいということです。

リコー三愛グループには市村さんという優秀な方がおられました。その偉勲の上にさらに社員全員の知恵をつみ重ねていかななくてはなりません。市村さんがおっしゃった知恵^{アイデア}ということでも、知恵^{アイデア}のリコー三愛グループということに寄りかかりすぎてはならないが、それをより発展的に継承しより高く変化させ、高い地位へと改革し上げていくようつねに努力をおしなくてはならないと思います。

ただ、その過程において同僚^{アイデア}にいい知恵が出た

からといって彼をおそれてはならないし、自分に知恵^{アイデア}が出なくなったらその同僚の傘下に喜んで入っていけるような人間にならなくてははいけません。敗けたときに大きく「敗けた」といえる人間になるべきで、そこからどんなバイタリティーが生まれるかということも大切です。敗けたからといってなげてしまったらおしまいです。人間のリレーションというものは、敗けた人間が作っていかなくてはならないと思います。

そしてまた、堂々たるオーナー・シップを持ち、その上で自画自賛をすべきです。そうすればどんなやな奴であっても、相手を理解できる余裕が出てきます。「日出ずるところの天子、日没するところの天子」という聖徳太子の言葉がありますが、あれは自画自賛の極地をいったもので大変結構な言葉です。自画自賛の主人を持った家庭は幸福になれますし、第一、コセコセしないから長生きもできます。

そうして自画自賛ではあるが大局的には謙虚でもあるときに、はじめて「為楽」から「悦」に入ることができ、あたらしいビジネス・バイタリティーも光彩をひととき増すのではないでしょう。

栄久庵 憲司 (えくあん けんじ)

1929年東京に生まれる

東京芸術大学図案科卒業 米国ロスアンゼルスアートセンタースクール留学

専攻 インダストリアルデザイン

現在 GKインダストリアルデザイン研究所所長
社団法人日本インダストリアルデザイナー協会理事長 株式会社トータルメディア開発研究所取締役

著書 「道具考」「現代デザインを考える」